

MCA で得られるもの

本間 哲也

(日老医誌 2019 ; 56 : 543)

深夜1時25分の羽田発マニラ行きの飛行機に乗り、現地の朝5時に到着した。入国審査に90分かかり、ようやく外に出られた。早朝にも関わらず、MCAの会場であるケソン市にあるSt. Luke's College of Medicineに勤務する若手女性医師に拾って頂いた。車に60分ほど揺られ、滞在先のホテルに届けて頂いた。ホテルにチェックインした後は湿度の高いマニラ市内を観光することができた。事前に用意したガイドブックを片手に、世界遺産などを見て回った。その晩はMCAを受講する初対面のインドネシア人とルームシェアした。お互い40歳前後の男性にも関わらず会話も弾んだ。羽田を出発してから、長い一日ではあったが東京より刺激的であった。

翌日の朝食は近くのピザ屋に用意されていた。ピザを食べた後に11時にMCA会場行きのチャーターバスに乗った。まだ受講生に緊張があったが、着いて間もなく開かれた昼食会では少しずつ会話が増えていった。フィリピンをはじめ、マレーシア、タイ、韓国、ベトナム、香港などから出席した講師が受講生のために、フレイルやサルコペニア、栄養などについて自らの研究内容と共に講義を行った。日本からは小島太郎先生が出席され、MCAの二日目にポリファーマシーや薬剤関連性フレイルについてご講義頂いた。講義内容や他国の受講生からの質問には、興味深い考えや視点が織り込まれていた。

MCAには講義のみならず、小グループに分かれて症例検討を行うセッションもある。また、自らの研究テーマを持参して、発表する機会もある。集まった大多数の国は、英語が母国語ではない。よって、お互い不自由を感じながら英語で発表するわけであり、私も目力で伝えたいことを訴える場面も多々あった。他国の受講生の研究テーマについて、討論することは非常に楽しい経験でもあった。

二日目も三日目も、朝7時にバスが来た。受講生で満たされたバス内や講義室内で徐々に連帯感を感じることができた。また、寝食をともにすることで、考えや文化



筆者のMCA初日のいでたち

の多様性を感じる事ができた。そして、その経験を自らに投影することにより、足りない部分も知ることができた。

最終日には修了証を頂いた。ハロハロを食べながらマニラ発の23時25分の飛行機に乗り、羽田に早朝4時45分に到着した。その日は教授回診のため、何もなかったかのように病院へ向かった。

参加の機会を与えて頂いた日本老年医学会の皆さま、充実した内容を提供して頂いたMCAの皆さま、そして安全に引率をして頂いた東京大学小島太郎先生に厚く御礼を申し上げます。駄文ではございますが、本体験記を通じてMCAにぜひ参加したいと思って頂けたら望外の喜びです。